

「サーキー・ナーマ」——イクバルのウルドゥー詩(4)——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、1936年に出版された、ムハンマド・イクバル(Muhammad Iqbal 1877-1938)の第2ウルドゥー詩集『天使ガブリエルの翼(Bāl-e Jibrīl)』に収録された「サーキー・ナーマ(Sāqī Nāmāh)」の全訳である¹⁾。

サーキー・ナーマとは、サーキー、すなわち酌人に酒を注いでくれるよう頼む内容の詩のことであるが、サーキーが、愛しい人や神秘道の導師、神などを指すことがあり、このような場合、酒は、愛、神秘的叡智、恩寵などを意味することになる。詩型は特に決められていない。イクバルのこのサーキー・ナーマは、マスナヴィー(mathnavī)詩型で書かれている²⁾。

到来した春の美しい情景を描写することから始まるこの詩は、7連で構成されている。第2連では、世界が新しい状況を迎えていること、すなわち資本主義の時代が終わり、中国、インド、アラブ地域が政治的に覚醒しつつあることが指摘されるとともに、ムスリムが「アジャム(‘ajam)」、すなわち非アラブ地域、特にペルシアの影響で本来のイスラームを忘却してしまっている状況が嘆かれ、第3連では、ムスリムの覚醒を願うイクバルの気持ちが表現されている。第4連、第5連では、「命(zindagī)」の本質が語られ、第6連、第7連では、命の「内奥の秘密」である「自我^{フディー}(khwudī)」の特質が語られている。

世界情勢やムスリムの精神状況に関するイクバルの認識のみならず、その有名な自我哲学が簡潔に表現された本詩は、短いながらも非常に重要な作品であると言えよう³⁾。

* 大阪大学世界言語研究センター教授

1) ラフィーウッディーン・ハーシミーは、この詩は1935年に作られ、詩集収録時に少し改変されていると述べている(Rafī'uddīn Ḥāshimī, *Iqbal ki Tawīl Naẓmēn: Fikrī aur Fannī Muqāla'ah*, Lahore, 1985, p.199.)。

2) マスナヴィー詩は、同一の脚韻を持つ詩句(2半句=2行)より構成される。1詩句が意味の最小単位で、詩句数には制限はない。脚韻は随時変更可能である。

3) イクバルは、ペルシア語詩集『自我の秘密(Asrār-e Khwudī 1915年)』と『滅私の秘儀(Rumūz-e Bē-Khwudī 1918年)』で自我を中心的テーマとして扱っている(それぞれ英訳がある。R. A. Nicholson, tr., *The Secrets of the Self*, London, 1920; A. J. Arberry, tr., *The Mysteries of Selflessness*, London, 1953.)。また、英語の講演集『イスラームにおける宗教思想の再建(*The Reconstruction of Religious Thought in Islam* 1934年)』に収められた講演“The Human Ego: His Freedom and Immortality”でも自我の問題が詳しく論じられている。日本における自我哲学の紹介としては、黒柳恒男「インドの思想家たち」『講座東洋思想』第7巻イスラームの思想(東京大学出版会、1967年)がある。

サーキー・ナーマ

春の隊商が天幕を張り
山の裳裾は楽園となった
薔薇、水仙、百合、野薔薇
無始より殉教の血に染まるチューリップ
世界は色彩の帳の中に身を潜め^{とぼり}
石の筋にも血が巡る
空は青く澄み、風は心地よく
鳥は巢に籠らない
山の溪流は飛び跳ねながら
止まり、うねっては、先へと進み
飛び上がり、滑っては持ちこたえ
曲がりくねっては前へと進み
ぶつかれば岩を切り開き
山々の心臓を切り裂いてゆく
紅顔^{サーキー}の酌人よ
溪流は命の言葉を聞かせている
仕切りを焼き払う酒を飲ませて欲しい
花の季節は毎日訪れたりはしないから⁴⁾
飲ませて欲しい、命の中心を輝かせる酒を
世界を陶醉させる酒を
世界誕生の日の熱気を持つ酒を
世界誕生の日の秘密を明らかにする酒を
酌人^{サーキー}よ、その秘密から覆いを取り去り
小鳥^{セクレイ}を鷹と戦わせて欲しい

時代の様相は一変した
新しい旋律が生まれ、楽器が取り換えられた
西欧の秘密が暴露され
西欧の奇術師は仰天している
古い政治手法は蔑まれ
大地は族長や君主を疎ましく思っている
資本主義の時代は去った
見世物を見せて手品師は去った
深い眠りから中国人は目覚め始めた
ヒマラヤの泉は沸騰し始めた

4) 伝統的に春は飲酒に最適な季節とされている。「仕切り (pardah)」とは、自分と酌人との間にある仕切りのこと。

シナイ山とファーラーン山の心は二つに裂け
モーセは神の御光を再び待ち望んでいる⁵⁾
ムスリムは唯一神の教えを熱心に信仰してはいる
しかし心には今尚異教徒の紐を付けている⁶⁾
文化、神秘主義、聖法、神学 ……
どれもが異邦の偶像を崇拝している⁷⁾
真理は戯言の中に失われ
ムスリム社会は因習の虜となってしまった⁸⁾
説教者の言葉は心を魅了するが
説教者は恋する欲びを知ってはいない⁹⁾
その説教は論旨明快ではあるが
言葉の網にからめとられている
神への奉仕において抜きんでいた神秘家は^{スーフイー}
愛において、自尊心において無比であった神秘家は^{スーフイー}
異邦の思想に己れを失い
旅人は道に迷ってしまった¹⁰⁾
恋の炎は消え、暗闇となった
ムスリムは消え、灰の山がある

^{サーキー}
酌人よ、昔の酒を飲ませて欲しい
再びあの酒杯を巡らせて欲しい
飛べるように私に恋の翼を付けて欲しい
宙を舞えるように私の土を^{からだ}蜜に変えて欲しい¹¹⁾
理性を軛から解放し
若者を老人の教師として欲しい
おまえがくれた水のおかげでムスリム世界の枝は緑となり
おまえが吹き込んだ息のおかげでこの肉体に息が宿る¹²⁾
身悶えする力を

5) 「ファーラーン (Fārān) 山」 メッカ近郊の山。この詩句はアラブの覚醒に言及している。原詩ではモーセは、「話す人 (kalīm)」と表現されている。モーセは「神と話す人 (kalīmullah)」と呼ばれている。

6) 「異教徒の紐 (zunnār)」 ムスリム支配地においてムスリム以外の者たちが異教徒のしるしとして腰に付けていた紐。

7) 「異邦 (‘ajam)」 非アラブ地域、特にペルシアのこと。

8) 「ムスリム社会」 原語は、ummat。

9) 「説教者」 イスラームの宗教指導者のこと。「恋する欲び」 熱烈な信仰の欲びということ。

10) 「旅人」 ^{スーフイー} 神秘家は神秘道を歩む旅人である。

11) 自分の光で光る蜜のように、人間も他者の助けを借りずに自分の力を発揮しなければならないとイクバルは考えていた。詩集『天使ガブリエルの翼』に「蛾と蜜 (Parwānah aur jugnū)」と題する、2 詩句 (= 4 半句) の短い詩があるので、参考までに訳しておく。

蛾：蜜よ おまえは蛾には遠く及ばない それなのにどうして火のない炎を自慢する
蜜：蛾でないことを神に感謝する 私は他者の火を乞うたりはしないのだ

12) 「ムスリム世界」 原語は、millat。

アリーの心、アブー・バクルの情熱を与えて欲しい¹³⁾
あの矢で再び心を射抜き
願望を胸の中に目覚めさせて欲しい
私は望む——おまえの天の星々が無事でいられることを
夜通し起きている地上の者たちが無事でいられることを¹⁴⁾
若者たちに燃える心を
私の恋を、私の眼^{まなこ}を与えて欲しい
私の小舟を渦巻から救い出して欲しい
止まっているのなら、動かして欲しい
私に生と死の秘密を教えて欲しい
おまえには世界がはっきりと見えているのであるから
私の濡れた眼^{まなこ}は眠りを知らず
心は懊悩を秘めている
私は深夜に泣いて懇願し
一人でいても人といっても悶え苦しんでいる
私は望み、私は願う
私は期待し、私は求める
私は時代を映す鏡である
それは思考^{ガゼル}の羚羊たちの草原である
私の心は命の戦場である
疑念の軍隊がいるが、揺るぎなき信念がある
酌人^{サーキー}よ、これのみが貧者の財産であり
そのおかげで私は貧しくても豊かなのである
それを私の隊商の者たちに与えて欲しい
一つ残らず与えて欲しい

命の大河は滔々と流れ
万物は活力に溢れている
命によって肉体は生まれた
炎の中には渦巻く煙が潜んでいる
水や土との交わりは不快ではあるが
水や土の営みは命には心地よく思われた
命は不動でもあり、活動でもある
諸元素の束縛を嫌ってもある
命は単一であるが多くの個物の中に封じ込められている
しかし、どこにあっても唯一にして無二である

13) 原詩では「ムルタザーの心 (dil-e Murtazā)」、「スィッディークの情熱 (sōz-e Šiddiq)」。「ムルタザー」は「選ばれた者」、「愛された者」という意味で、第4代カリフ、アリー (‘Alī) を指し、「スィッディーク」は「誠実な者」という意味で、初代カリフ、アブー・バクル (Abū Bakr) を指す。

14) 「夜通し起きている地上の者たち」 一晚中神に祈っている敬虔な者たち。

この世界、この六つの方向を持つ偶像寺院
このソームナートの寺院を作り出したのは命である¹⁵⁾
命は同一物の反復を好まない
私はおまえではなく、おまえは私ではない
「私」と「おまえ」によって宴を生み出しているながら
命自身は宴の只中に一人坐している
命の輝きは、稲妻の中に、星の中にある
銀の中に、金の中に、水銀の中にある
命によって荒野があり、アカシアがある
棘があり、薔薇がある
命の力で時には山が砕け
命の網に時には天使ガブリエルと天女がかかる¹⁶⁾
時には素早い鷹が
やまうがら
山鶉の血でその爪を濡らす
時には鳩が巢から遠く離れ
罌にかかって激しくもがく

静止し安定しているように見えるのは目の錯覚である
宇宙の原子一つ一つが悶えている
存在の隊商は停止しない
存在の輝きは常に更新されるのである
命は謎だとおまえは思い込んでいるが
命とは飛翔する意欲のことである
命は数多くの山や谷を見た
命は休息よりも前進を好む
命にとって旅は糧である
旅こそ真実、安住はまやかしである
囚われては解き放たれることを命は歡び
身悶えすることに命は安らぎを感じる
死と直面した時
命が死を押さえつけるのは容易ではなかった
報復の世界に現れて
命は死を待ち伏せた
命は対^{つい}を望み、対^{つい}が生まれた
荒野や山から大軍が現れた¹⁷⁾

15) 「六つの方向」 東西南北そして上下の六方向。ソームナート (Sōmnāth) 寺院は、西インドのグジャラートにあったヒンドゥー寺院。ガズナ朝のマフムード (Mahmūd 971-1030) によって破壊された。

16) 「命の網に…」 命は天上界にまで達することができるということ。

17) 雌雄、男女が生まれ、世代交代していくことによって命は死を克服したということ。

命の枝から花は散り
命の枝に花は咲き出た
命は儚いと愚か者は考えるが
命のしるしは消えても消えても現れる
命は素早く走り、素早く目的地に到達する
無始無終の時間を端から端まで一息に疾走する
時間とは日々の連鎖であり
息の出し入れのことである

この息の波動は何か——^{つるぎ}剣である
自我とは何か——^{やいば}剣の刃である
自我とは何か——命の内奥の秘密である
自我とは何か——世界の覚醒である
自我は顕現に酔い、孤独を好む
大海が一滴の水の中に潜んでいる
暗闇の中でも光の中でも自我は輝きを放ち
「我と汝」の中に現れ、「我と汝」にまみれない
背後にも永遠、前方にも永遠
自我の前後に際限はない
自我は時間の河を流れる
波の虐待に堪えながら
探求の途を変えながら
見る方向をたえず変えながら
自我の手の中では重い石も軽くなり
自我の打撃によって山も流砂となる
自我の始まりも旅、終わりも旅である
これこそが自我の暦の秘密である¹⁸⁾
自我は月に潜む光、石に潜む火花である
色に浸ろうと自我は無色のままである¹⁹⁾
自我は量の多少や
高さ低さ、前後関係など何の関わりを持とうか
世界誕生の日からもがいている自我は
^{つちぐれ}土塊の人間の中に姿を現した
自我はおまへの心の中にある
天空が瞳の中にあるように

18) 「暦」と訳した語 *taqvīm* をグラーム・ラスール・メフル (*Ghulām Rasūl Mehr*) は、「安定」、「強化」という意味にとっている (*Ghulām Rasūl Mehr, Maṭālib-e Bāl-e Jibrīl*, Lahore, 1982 [originally published in 1956], p. 175.)。

19) 石が打ち合わされたときなどに出る火花は、元々石の中に潜んでいると考えられている。

日々の糧を得るのに名誉を失わなければならないのであれば
そのような糧は自我の守り手には毒物である
自我の守り手にとって価値ある糧とは
胸を張って生きさせてくれるような糧である
マフムード王の権勢に目を奪われてはならない
自我を守らなければならない アヤーズになってはならない²⁰⁾
行うに値する平伏とは
他の平伏を不法行為とする平伏である²¹⁾
この世界、この色と音の騒乱
死の支配下にあるこの世界
この世界、この目と耳の偶像寺院
生きることとは飲食することに過ぎないこの世界
自我にとって最初の宿营地であるこの世界は
旅人よ、安住の地ではない
おまえの火はこの土砂捨て場から生じたのではない
おまえが世界に依存しているのではなく、世界がおまえに依存しているのである²²⁾
この重い山を打ち砕いて進まなければならぬ
時空の呪縛を打ち破って進まなければならぬ
自我は神の獅子であり、世界はその獲物である
天も地も自我の獲物である
世界は他にも存在する、未だ姿を見せていないが
存在の内奥は空洞ではない
どの世界もおまえの攻撃を待っている
おまえの活発な思考と行動を待っている
おまえの自我がおまえの前に姿を現わすこと
それこそが時の運行の目的である
おまえはこの美しく、醜い世界の征服者である
おまえの運命がどういふものか、私に言えようか
真実には言葉の衣服は窮屈である
真実は鏡、言葉は錆である²³⁾
息の蠟燭はまだ私の胸の中で輝いているが
舌は「もう十分」と言っている
「もしあと髪の毛一筋でも高く飛べば
御光の輝きが私の翼を燃やしてしまうであろう」²⁴⁾

20) アヤーズ (Ayāz) はガズナ朝のマフムード王に寵愛された奴隷の名。

21) 平伏すべき相手は神のみということ。

22) 「この土砂捨て場」 この世界のこと。

23) 言葉は真実という鏡 (金属製の鏡) を見えなくする錆であるということ。

24) イスラームの預言者ムハンマドを天へ導いた天使ガブリエルが言ったとされる言葉。この詩句はペルシア語。